

令和3年度を振り返って

令和3年度は、『変化と成長～考動する看護部組織を目指して』を目標に、令和元年度から取組んできた3つの目標「看護提供体制の構築」「入退院支援体制の構築」「新外来看護体制の基礎づくり」と、3つのプロジェクト「病床管理」「看護提供体制」「外来看護」を継続して取り組みました。さらに令和4年5月に開設する新病院の新たな機能と使命を果たすため、看護部と各部門間の運用の検討を行うなど、看護部目標と新病院に向けた取組など様々な活動を行いました。その過程の中で、この一年間はCOVID-19への対応に尽くしてきたと思います。



COVID-19 陽性患者と疑い患者さんを受け入れる体制を整えるため、4月は運用上の病棟再編から始まりました。病棟機能の変化に伴いスタッフも異動し、従来にも増して一般病棟は複数科と重症患者さんを受け入れる状況となりました。また、COVID-19 受入れ病棟は、看護ケアの手順など全くないため一つ一つ感染管理認定看護師とスタッフが模索しながら作成しました。受け入れ病棟と中央処置室のゾーニングなど、日々目まぐるしく情勢が刻々と変化し、過酷な状況にスタッフは葛藤しながらしかし柔軟に対応してくださいました。第1波、第2波を経験し、持続可能で看護部全体で看護が出来る体制づくりが重要と考えました。そのため、第3波に対応するため、看護部が一体化しCOVID-19看護に取り組むことを考え、全部署のスタッフに意向調査を行い看護ケアチームを編成しローテーション体制としました。この体制は現在も続いています。

世界ではワクチン接種は開始されていますが、COVID-19の終息はまだ見えてはきません。そのような環境下の中で、高度急性期医療の提供とCOVID-19の双方に対応できているのは順応できるスタッフがいるからだと確信しています。改めて、看護専門職の責任感と看護実践力そしてチーム形成し協働する人間力の高さを感じました。とても感謝しています。

新病院への具体的な運用策定や移転準備、COVID-19の対応、高齢社会による看護師の看護業務が多種多様多量も想定され課題はまだあります。今後を見据えて、看護師が看護に専念できるような環境となるように、多職種協働のあり方を検討し、働きやすい環境となるようなシステム導入などに取り組んでいきたいと思えます。

看護専門職としての力量を高める努力を惜しまず、それぞれの生活を大切にできる職場づくりに今後も励んでいきたいと思えます。

看護のココロと看護のチカラ、そして協働のチカラを最大限に活かすことを考えて、これからも努力したいと思えます。

広島市立北部医療センター安佐市民病院
副院長(事) 看護部長 松原 朱美